

# スキー合宿に参加して



5月から始まった万石浦でのこども支援もそろそろ(いったんの)終わりが近づいて来ました。お別れを目前にして行われた今回のスキー合宿。行き帰りの便の欠航などトラブルもありましたが、こどもたちはいつもと変わらない元気いっぱいな姿で楽しんでいました。しかし、そんな楽しい旅行の中でもやはり、「別れ」というものを考えざるを得ない状況がありました。旅行1日目のふりかえりの時間です。この日はお別れ会の準備のために震災からの1年間、そしてライオン隊での活動全体を通してのふりかえりが行われました。震災当日のことを語る子、ライオン学校で新しい友人と出会って一緒に遊んでいることを嬉しそうに話す子、初めてライオン学校に来た日のことを思い出したり、お世話になった人への感謝の言葉を考えたり、ひとりひとりがいろんな形でふりかえりを行っていました。そんなふりかえりを通して感じたのが、多くのこども達がライオン学校一時休校に対して「なんとも言えない不安」のようなものを共通して持っているということでした。いまや「小学校よりライオン学校の方がいい!」とこどもたちに言われるまでの存在になったこの支援活動。「なくなっちゃうのは悲しいけど、仕方ないことだから…」というこどもの言葉に、大学生としてこれから自分のできることはないかと考えさせられます。こども達の中にはまだまだ解決の難しい問題を抱えている子がいます。最近になって急に不安要素が出てきてしまった子もいます。こども達だけでなく私自身も3月の「別れ」に不安を感じています。どういった形で次回のお別れ会を迎えるべきか?その後、大学生としてこの活動を何とか続けていくことはできないか?ひとつの支援活動に区切りをつけることはここまで覚悟のいることなのだという事を思い知らされています。震災後1年を越えて、被災地でのこども支援がどういった形になっていくのか、私にはまだまだ分かりません。

(古浦新司 東京理科大学学生)

万石浦のライオン学校のみんなで2月25日～26日にかけて一泊二日のスキー合宿に行ってきた。合宿前日に参加する子供たちの家に家庭訪問すると、子供たちはびよんびよん飛び跳ね、にこーっと笑顔で「明日楽しみ!」「楽しみ過ぎて寝れねえかも」と迎えてくれました。前回の活動で、はりきってかまくらを作っていた男の子は「かまくらな、あれから三日目に少し溶けた。それから三日後に全部溶けたんだよ」と話してくれました。どうやら前回の活動が終わってから毎日見に行っていたよ

うです。

そして迎えた当日の朝、みんな遅刻することなく集合し、ハイテンションで出発しました。仙台空港で雪により出発が遅れた飛行機を待つ間、ケンカをしながらも、無事に新千歳空港に到着しました。飛行機の手配をしている大人に対し、子供同士で遊んだり、走り回ったりとこどもだけで遊んでいたのが印象的でした。活動が始まって約1年、子供たちは確実にそれぞれの関係を築いているように思います。私は最初から活動に参加している3人の女の子と同じ部屋だったのですが、問題を抱えている女の子を他の子供達が気遣う発言が所々にみられました。その子を思いやるような発言を聞くのは今回が初めてでした。

一方で子供たちの様子や環境も刻一刻と変化しています。ここ最近学校で友達と上手くいけなくなったり、震災によって家も家庭環境も変わったり、子供たちだけでなく保護者も余裕がなかったり・・・子供たちは不満のような、苛立ちのような、不安のような言葉で言い表せない気持ちをそれぞれが抱えています。そんな子供たちにとってのびのび遊んだり、思っていることを話せたりする「万石浦ライオン学校」が「居場所」になっています。

帰りのバスでも「飛行機、欠航にならないかなあ」という発言があちこちから、そんな子供たちに神様も味方になったのでしょうか、本当に欠航になりました。子供たちをいつも見守ってくれるように願わずにはられません。

(大林沙紀 東京理科大学学生)

白戒の旅：今回の「お別れ旅行(スキー合宿)」は、実に波乱に満ちた2日間だった。1日目は仙台が雪の影響を受けて足止め。2日目の帰りでは、仙台から新千歳に向かっていた便(この飛行機に乗って帰るはずだった)が、またも雪の影響で着陸できず仙台へ戻ってしまい、その日の欠航が決まった。子供たちは、行き帰りで合わせて約10時間以上を空港で過ごしたことになる。結局は成田空港まで行き、レンタカーを借りて万石浦へ子供たちを送り届けたのは、翌日の午前4時だった。

もちろん、冬の北国への旅行ということで、“もしも”の事態を予測していないわけではなかったが、初日から不安なスタートを切り、慣れないスキーで体力を使い、空港では交錯する情報に追われ、運行掲示板の「遅延/欠航」の文字に苛立ち、大人たちの余裕も無くなっていた。おそらく、こども達の中には“いつもの”ライオン隊として来

る「おじさん（たち）」の表情とは違って見えていたのかもしれない。

私は子供たちの相手をしながら、少し引いたところで空港内を見渡していた。そこには、時間が経つにつれて混雑さを増す受付ロビー。待合いのイスは満席で、手荷物を座布団代わりに地べたに座る人たち。喫煙所では密閉された空間で口々に不安や不満を漏らしているが、煙草で気を紛らわそうとしている人たち。携帯電話が命綱だと言わんばかりに、皆一様に片手に握り締めている人たち…。

今回は“天災”と呼べるほどのものではなかったかもしれないが、“あの日”の光景がフラッシュバックしてしまったのは私だけだろうか。私は、被災直後の避難所（体育館など）の様子を見て、『こどもが、気を遣っている』という強烈な印象を思い出した。どこか、殺気立っている大人たちをこども達の目にはどう映っていたのだろうか。

今回の旅では、こども達はそれぞれに自立をしていた（しようと意識していた）。こども達は空港で何時間待たされても、大きなケンカになることもヒステリックになることもなかった。私は、こども達が今回どのような思いでこの「待ち時間」を過ごしていたのか、非常に気になった。確かに、“出会った当初”を思い返せば全体的に落ち着いてきたことは確かである。しかし、私はこども達が「自立した」「大人になった」という勝手な感覚に偏りすぎていたのかもしれない。

空港の雑踏を眺めながら、自分を少し戒めた。こども達にとって何ができるのか、何が必要なのか、また、『何を経験してきているのか』ということのを改めて考える旅となった。  
(小沼慶多 引地台中学校教諭)

今回のスキー合宿は悪天候のため予想外の事態が多くありましたが、その中でも彼らは文句や暴れるよりも、「みんな」で乗り越えようとしている雰囲気があったように感じました。3月にはお別れということで、彼らはどんな風に気持ちを整理していこうかと思いつきながら、私はみんなが北海道に到着するのを待ちました。今回の合宿で印象に残ったことが2つあります。

1つ目は、自分以外の人を心配する姿です。はじめは行きの新千歳空港でのことです。仙台空港を出発する組が、雪の影響のために飛行機の便を変えて2手に分かれたため、先に北海道に着いた子どもたちが何人かいました。何時間も空港で待たされ、さぞかしイライラしているだろうと思っていましたが、先に着いた子たちは、後から来る子たちをじっと待ち始めました。「ちゃんと着けよ～」と他の子を心配していました。帰りもやはり雪の影響で飛行機を待つことになったのですが、彼らは自分のお菓子や買ったばかりのおみやげをみんなに分けてあげていました。決められたお小遣いの中で迷いながら買ったものなのに…。彼に「おみやげなんでし

よ？」と聞くと「うん。でもここでみんなと食べたほうがいい！」と答えました。「みんな」という言葉がたくさん聞けました。あの悲惨な経験をし、荒れていた子たちが「みんな」の中で自分以外の人間を気遣っている、思いやりを持って生き始めている姿を見て、成長を感じました。子どもたちの言動は、支援が始まった頃の、自分のことだけを考えていた頃とはまったく違いました。

2つ目はふり返りの時間です。「一年間を振り返って」は、少し話しながら整理していった方がいいかなと考えていると、2年生の男の子はもう書き始めていました。私には友だちに向けて書いてもいいか確認し、伝えたい人に書いていいんだよと答えると真剣に1人で文字を書く時間が続きました。私が支援に入った頃の彼らからは「うざい」「死ぬ」のような言葉ばかりが飛び出して、自分を語る言葉はほとんどなかったのに、自分の力で伝えたいことと伝えたい相手を見つけられた。このことはとてもうれしかったです。彼はしおりに文字を書き終わると、周りで遊んでいる子たちには目もくれず、宿の一つ一つの部屋の絵を描き始めました。「忘れたくないから」そう私に教えてくれました。遊んでいた子たちは、その子の近くでは騒ぐのを自然に止めて、その子のために描く場所をあけてあげるといふことさえしていました。中にはその姿を見て思い出したようにカメラを取りに行き、写真で記録している子もいました。宿の絵を描き終えたとき、彼は「お前も忘れんなよ」と言いました。真剣な顔でした。

ライオン学校の「閉校」に向けて、私も整理していかなければいけません。私自身、この今までの支援が自分にとってどうだったのか、語ることがまだできていません。彼らに会いたいから…そんな気持ちで毎回石巻に向かっていたと思います。でも今回の彼らの成長や自立を感じさせる姿を見て、子どもたちが成長するために必要なことが分かった気がしました。私たちはいつか彼らの前からいなくなってしまいます。でも彼らと一緒に過ごす中で見えてきた自立しようとする力と課題を、これから生きていくための力にできるよう、近くにいらなくても彼らと関わっていきたいと思います。  
(吉間里依 大野原小学校教諭)

## NPO法人教育支援グループ Ed.ベンチャー

〒242-0007 大和市中央林間3-16-12-107

Tel/Fax:046-272-8980 e-mail: toiwase@edventure.jp

